

第109回 国立大学法人信州大学経営協議会 議事要録(案)

日 時 令和5年9月29日(金) 14時00分～15時30分

場 所 信州大学松本キャンパス 本部管理棟5階 第一会議室及びオンライン会議

出席者 中村(議長)、太田(哲)、小川、熊谷、中島、野原、萩本、永松、平野、不破、高口、
藤澤、浜野 各委員

欠席者 太田(寛)、野上、安田、向 各委員

オブザーバー 宮崎、平林、林、米倉、奥山、森川、天野、花岡 各副学長
湯澤副理事
北原、原 各監事

前回議事要録確認

議事に先立ち、議長から、第108回議事要録(案)について諮られ、確認された。

議 題

- 1 令和5年度国立大学法人ガバナンス・コードにかかる適合状況等に関する報告書について
永松理事から、資料No.1-1及び1-2に基づき、令和5年度の国立大学法人ガバナンス・コードにかかる適合状況について説明があり、審議の結果、承認された。
- 2 事務局長制等の基本方針及び関連規程の改正について
永松理事から、資料No.2に基づき、事務局長制等の基本方針及び以下関連規程の改正について説明があり、審議の結果、承認された。
 - ・国立大学法人信州大学組織に関する規則
 - ・国立大学法人信州大学業務執行に関する規程
 - ・国立大学法人信州大学業務執行組織規程

報告事項

- 1 令和6年度文部科学省概算要求概要（信州大学分）について
藤澤理事から、資料No.3に基づき、令和6年度文部科学省概算要求概要に係る信州大学分の要求事項について報告があった。
- 2 令和4事業年度財務諸表の承認について
藤澤理事から、資料No.4に基づき、令和4事業年度財務諸表が文部科学大臣の承認を受けたことについて報告があった。
- 3 その他
永松理事から、本学における情報系人材養成について、今後は理工系の高度専門人材として大学院レベルでの人材養成を進めること、それについて大学のホームページで公表したことについて報告があった。併せて、その元となる大学・高専機能強化事業に無事採択されたことについて報告があった。

【意見交換】フリーディスカッション

【話題】本学のグローバル化戦略について

米倉副学長から本学のグローバル化戦略について説明し、また林副学長から、本学を含む国内複数大学と台湾によるコンソーシアムで進めている地方創生に関する教育・研究の取組について説明した後、意見交換を行った。

【Web公開用には、次の委員等からの主な意見等は掲載しない。】

委員からの主な意見等は、次の通り。

- ◇ グローバル化については、当社では信大からの留学生を含めマレーシアの学生2人、中国の学生4人を受け入れ、中国の留学生はそのまま残って日本と中国を行き来し、大活躍しています。彼らは信大の留学生の中でも問題意識が高く、中国へ帰って事業をやりたいというニーズがはっきりしていました。我々としても彼らを正社員として採用し、日本人と全く同じ幹部研修をしながら、現地の経営責任者として教育をしてきました。大学での取り組みや文部科学省の様々な取り組みについては全くそのとおりですが、地方に就職する上での問題は、大学院を修了すると大企業へ行きたい、と考える学生が非常に多い、ということです。初任給や色々な面で、地方就職よりも条件が良い大手に、というように、日本人と同じ感覚が強くなって来ています。外国人の理工系の優秀な卒業生を採用することが難しい状況になっており、企業サイドでもそうした課題が現実にある、と痛切に感じています。
- 学部留学生を増やしたい、というのはかねてから本学でも話し合っています。昨今、授業料免除を国が担保する、というところで、授業料免除の留学生枠は維持し、それを引き金にして本学へ学部から進学してくれるようになったらいいと考えています。
- 獲得戦略としては、協定を結んでいる高校を対象として、今までも特別入試ということをやってきましたが、今後総合型入試のような、もう少し広げて計画ができればいいと考えています。県内就職というところでも、GEC（信州大学グローバル化推進センター）内でも課題と認識しておりまして、先ほどの概算要求で、長野県の企業と繋いで、魅力を伝えることが重要・必要なんじゃないか、ということで、企業とつなぐユニットを作りたいという想いから構想しました。
- 留学生が「来たいな」という環境を作ることが重要と考えています。信州大学の場合は、留学生が「こういうことを勉強したい」「こういうことをしたい」というニーズについて、英語で十分に応えられる環境にあるかについては弱い部分があり、彼らのニーズに応えられるプログラムを準備することが重要と考えています。
- ◇ 日本人学生の送り出しについて意見を述べさせていただきます。私のところでも、先月から今月にかけて、JASSOから奨学金をいただいてベトナムへ学生を派遣しています。最近の学生を見ると、例えば海外インターンシップで1ヶ月のプログラムがあるよ、と声を掛けても手を挙げる学生が少ないのが現状です。行きたくない学生を無理やりに連れて行くのか、または手を挙げた学生を連れていくのか、色々と考えられるかと思いますが、私たちのところでは、入試の段階で手を挙げる学生を増やすような対策を考えています。例えば推薦という特別入試を使って、英語の配点を少し高くし、学力は多少目を瞑って海外志向のある学生を獲得する、というような仕掛けも考えています。信大ではどのように考えているか、お聞かせいただけますか。
- 入試は必要だと思いますし、男女共同参画にしても外国人の受け入れにしても「多様性」という点で似ていると思いますが、自分になりたいようなロールモデルを、その大学に作らなければいけないと思います。また、既に留学や就職において、海外で活躍している人の情報を今の学生に積極的に発信していくことも重要だと思います。留学生に来ていただく際も同じことですが、先ほどのお話でマレーシアからの留学生は（母国に）帰られたというお話をご紹介いただきましたが、恐らくムスリムの方だと思います。世界的に見て爆発的に増えているのは宗教ではムスリムなのですが、ムスリムを受けれるような地域社会として、例えばプレイヤールーム（礼拝室）やハラール食などの基礎がなければ、ムスリムの方がそこで暮らすのは難しいです。そうした環境整備とロールモデル等、色々なところでサポートすることが大切だと感じました。

- 今までの傾向では、（大学が）何もしなくても海外へ行く学生はおり、そうではない学生、行きたいけど行けない、（海外へ行くことが）怖いという層をどう発掘して伴走するのか、ということを考えています。本学ではグローバルコア人材養成コースを6、7年やっておりまして、その中で分かって来たことは、途中でフェードアウトする学生が多い、ということです。ですので、先ほどの概算要求の組織の話にも繋がるのですが、学内と繋ぐ、ということで、そうした学生を1年生の間にプールしておいて、2年になって各学部へ行った後も伴走していく、というのが重要だと思っています。また、もう1つは、多くの学生は（外国の人と）話すのが怖い、ということをおっしゃっていますので、それに対してはCOIL (Collaborative Online International Learning) というのが非常に良いきっかけ、入口だと考えております。1、2年からCOILという形で外国の人と会話してもらい、言葉が通じたときの喜びを感じられれば、実際に海外へ行ってみたいという意欲へ繋がるとおっしゃいますので、伴走しつつ、グローバルコア人材養成コースもCOILを活用したものに換えようということで検討しています。
- 信州大学ではグローバルとローカルは理念に入っていて、その理念を飾り物にせず、どうやって先生と学生のマインドに落とすかが重要ではないかと思っています。その仕組みを「信大コンピテンシー」を通じて、学生たちに前期・後期の授業を受けた後に1年を振り返っていただく、また、教員もこれについて学生と面談してその意識を高めていく仕組みを考えています。今の話にもありましており、学生は色々なプログラムを経験しますので、そこでグローバルマインドがどれだけ育ったか、教員も学生と一緒に高めていく仕組みが必要だと考えています。
- ◇ 現在カナダに学会で来ておりまして、本日スチューデントコンペティションがありましたが、日本人は一人だけで、ほとんどはカナダの大学の学生でした。アフリカや東南アジアなど、多くの国から留学生が来ている理由を考えておりましたが、浜野理事のご意見が非常に重要なのではないかと、おっしゃいました。カナダに最初の時期に来た留学生が、その大学で学位をとり、カナダの大学に就職して准教授、教授になっていたり、企業に就職したりしていて、様々な国から来た人たちのロールモデルがいます。そうしたロールモデルとなる人たちをしっかりと育てて作る、ということが大事だな、と思い当たりました。また、一方で日本人は自信がない人が多いと思うので、海外から留学生が来たら、その留学生と交流することで、Broken Englishでも通じるんだ、という自信を持たせることで、いずれ自信を持って海外にいく人が増えて来ると感じました。1点質問なのですが、さくらサイエンスプログラムで、学部学生を日本に招いた場合に、授業が恐らく日本語で行われていると思いますが、学部の中でどうやって留学生が生き生きと学んでいくことができるのか、お考えになっていることをお聞きいたします。
- さくらサイエンスプログラムは英語で授業をしています。また、授業だけでなく、テーマを決めて、例えば農学部であれば「Food」ということをテーマとし、長野地域の食品会社を見学したり、テーマに沿った日本語の授業を受けたり、というプログラムになっております。
- 本学の卒業生の中に海外で頑張って活躍されている方がいるので、そうしたロールモデルを集めていただくと、励みになるとおっしゃいます。一歩踏み出す、というところでは私の師匠から、「This is that」でプレゼンすれば良いんだ、ということをお聞きして、実行してきました。それが重要だと思っており、それを私自身も学生へ伝えて行きたいと思っています。
- ◇ 先月末になりますが、私立大学連盟の学長会で、ちょうどグローバル化が話題になりました。そこでは、日本からの留学については、単位認定・学位取得をもっと推進すること、留学生の受け入れについては、受け入れた学生が日本国内で就職をすることが大きな目標ということをお聞きしました。信州大学で行っていることは、まさにそれらを前向きに実践されていることで、高く評価されることだと思われました。ただ、先ほどのご発言にありましており長野県内への就職となると別の問題が起こっているということですが、データを見ればいわゆる地元への定着率は良いということですので、これは企業努力を求めることになるのかもしれませんが、職場環境や給与面というも大事なのかな、と思っております。それから、日本からの留学については、本学も文学部外国語学科というところで、2年生の春学期、1セメスターの卒業必修の短期留学を実施しておりま

す。コロナ禍でオンラインに切り替えるなど苦労をしていたところですが、今年からは実際に行けるようになりました。しかし別の問題も起こって来ており、例えば為替レートの問題や航空運賃の問題があり、相当費用がかさんで来るというような問題も起こってきておりますが、そうしたさまざまな問題を乗り越えることが大事なかな、と思っています。先ほどのお話しにありましたグローバルコア人材養成コースは、非常に充実した特別教育プログラムであり、留学生の送り出し、受け入れに対しても有効であると再認識しました。

- ◇ 国際化、グローバルの活動においては、COILやサテライトオフィスなど、日本の大学の中でも進んだことをやられていて、素晴らしいことだなと思っています。ただ、COILのゴールが15%でもうすぐ達成というお話や、サテライトオフィスがあと3件ということですが、世の中の流れと、日本の少子高齢化という問題からして、大学経営において留学生の比率というのは、早急に上げて行かないと経営自体が成り立たなくなるのではと考えています。日本国内トップクラスでこうした活動をされているのであれば、逆に世界レベルの大学と比較しても、より魅力的に人を引っ張れるような発信をさらに継続し、COILも経験者15%からさらに一気に50%にあげるとか、留学生比率も一気に3割まで上げるには何をやらなければならないか、とか、より日本人にも外国人にも選ばれるような次の展開を考えると面白いんじゃないかな、と思って話をお聞きしていました。世界の大学ランキングでこれくらいまで持っていきたいな、というようなお話があれば是非お聞きしたいです。
- 最新のTHE (Times Higher Education) ランキングでは、本学は1000番台で、1000から1200番のレンジ（最終から1段階上のレンジ）の評価でした。
- 当初、THEが広く世の中に出回る前は、本学は400から600番のレンジでしたが、どんどん落ちて一時期最終レンジでした。その後、産学連携が評価指標に入ったので、日本の大学のランクが少し上がったということを新聞で読みました。グローバル対応については、本学で選考が始まったところですが、ネイティブな外国人数員5名を雇用するということで進めています。
- ◇ 海外に創るサテライトオフィスの設置について、どういう経緯でそれができたのか、どんな意図があるのか、と思いながら話を聞いていました。近年、国家間の事情も大きく変化しています。良くも悪くも、このような社会の変化に追従しなければなりません。自分は産業人なので、これからどういう産業が世の中を支配するのか、あるいはどういう技術が必要になるのか、という点で、先々を見据えた上での相手先の選考ということも必要になるのではないかな、と思います。一方で、近年は新型コロナが流行し、大学はこれからしばらく、コロナの影響を受けた学生が入ってくるという時代を経験することになると思います。自分の周囲の子供たちを見ていても、旅行でさえ遠くには行かない、運動会もやらなかった、という状況です。今後、そうした学生を受け入れる大学は、グローバルと言いながら内向な学生が大量に入ってくる時代を迎えるような気がします。そのことに対する対処法を十分に考えた上で、これから創られるオフィスのことも戦略的に考え、新時代に備えていただきたいと思います。
- リール大学の関係は、フランスと日本の2国間のプロジェクトがあり、工学部の田中先生とエルナン先生がけん引されていて、学生も両方で交流をしていた関係からサテライトオフィスができました。タイのナレースワン大学とマレーシアのプトラ大学は、工学部の中で、例えばエネルギー等のテーマでコラボラティブプロフェッサーが2人ほどいますし、そういう中で始まりました。教育もありますが、割と研究オリエンテッドな面もあると思っています。フラウンフォーファー研究所は県が主導で進めていて、そこに工学部も協力しています。
- 河北医科大学は100人以上の卒業生が信大で学位を取得されていて、また医学部だけでなく河北省に信大にゆかりのある人がたくさんおられます。河北省と長野県は友好提携協定の締結をしており、今年はまさに40周年ということで、周年事業の知事訪問団で私も同行させていただきました。
- 河北省と長野県は連携していて、農学部も河北農業大学と連携しており、緊密な関係を築いています。研究オリエンテッドというお話もありましたが、単なる一方通行ではなく、お互いにファ

ンドを共有しながら、持続可能なサテライトオフィスにしたいということで進めており、着実にステップを踏んでいると思っています。

- ◇ 中国は、医科大学と中医薬大学があり、臨床医の養成は中医薬大学が中心であったかと思います。医科大学は確か全国でも7、8大学だったと記憶しています。医科大学は、昔は研究者養成が主だったのですが、今は臨床医・研究者両方を養成しているのでしょうか。河北医科大学が研究者養成の大学で、そこの卒業生が信州大学で学位を取得されているのだとすると、その方が信州大学や日本に根付いていただいて、そこで素晴らしい研究をしてコラボができると良いな、と思って発言させていただきました。
- 貴重なご意見ありがとうございました。参考にさせていただきます。

次回開催予定：令和5年11月28日（火）